
朱に咲く 名も知らぬ花 髪にさし

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱に咲く 名も知らぬ花 髪にさし

【コード】

N9984N

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

朱に咲く 名も知らぬ花 髪にさし 彼女は笑んだ 待っていませんと

「いいじゃありませんか。どうぞお行きになってください」
その答えに私は驚いた。

「何、鳩が豆鉄砲食らったような顔をしているのです?」

「いや、てつきり反対されるものだと思っていたから」

彼女は花を手折り、腰を上げ、私を見上げた。

夕映えの通いなれた道はひどく美しかった。

「私が反対しても貴方様は行くのでしょうか?ならば、すぎるだけ私が惨めなだけです」

一度決めた事を女の言葉一つで揺らぐのは男らしくないとは思えど、全く引きとめられないと言うのもまた心に引っかかりを感じる。

「絶対に都会に出て、成功して、お前を迎えに来る。それまで待っていてくれ」

「嫌ですよ。私は待ちません」

彼女は手に持っていた花をまるで子供のようにはげにさす。

「だって、いつ帰って来るか分からない男を待つて過ごすなんて惨めじゃないですか」

私は彼女の肩に手を添え、じっと彼女を見つめる。

少し日に焼けた肌も夕日の朱で薄化粧している。

「惨めなのは嫌か?」

「ええ、嫌です」

じっと私の瞳を見返す彼女の瞳は、刀の切っ先をのど元に突き付けられたような、体の自由を奪う力を持っていた。

抱き寄せようとも考えていたが、肩に置いた手は動けないでいた。震えていないだけでもましではあるが。

「好いた男のためでもか?」

彼女は顔をそらし、困った様な表情をしていた。

彼女には私は駄々をこねる子供のように見えているのかもしれない。

「私は必ず戻ってくる。そして、お前を幸せにしてみせる。絶対に、だ」

「そうですか。では、」

彼女は笑んだ 待っていますと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9984n/>

朱に咲く 名も知らぬ花 髪にさし

2011年10月9日17時48分発行